タイトル:「遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—」(平成20年度第2回研究会)
日時:平成20年12月7日(日曜日)午後1時30分より午後5時30分
場所:AA研マルチメディア会議室(304号室)

1)
報告者名(所属):
渡辺健哉(AA研共同研究員,東北大学)
報告タイトル:
「第四届科挙制与科挙学研討会参加報告」

本報告では,2008 年 10 月に中華人民共和国天津市で行われた「第四届科挙制与科挙学研討会」の概観を紹介し,あわせて,近年の日本・中国・アメリカにおける科挙研究の現状,及び現在進行しつつある科挙をめぐる諸プロジェクトについて紹介した。

研討会のタイトルに掲げられている「科挙学」という名称は,廈門大学高等教育研究中心の劉海峰教授によって提唱された。劉氏の唱える科挙学は,文学・社会学・教育学など広範な学問分野を包括している。まずはじめに,この「科挙学」について紹介した。ついで,本研討会において報告された遼・金・西夏に関わる論考三編の内容を紹介した。

自らの報告は,元代の挙業書である『新刊類編歴挙三場文選』の策問とその対策に注目し,そこに反映される社会状況について,具体的には天暦二年江西郷試の問題とそれに対する三つの解答を分析した。この検討を通じて,策問で問われる内容が仁宗朝以降の社会問題の反映である点を強調した。例えば,常平・義倉の制度の実態,混乱する貨幣経済の諸相等が出題内容に反映されている。このような元代中期以降に噴出する問題を理解してはじめて,次の明王朝が出現する必然的状況が浮かび上がっていくであろう。つまり,科挙答案の分析は,当時の学問的傾向や文章のスタイルを理解する上で有為であるというだけではなく,当該時代の社会状況を明らかにする上でも有為な材料となることを指摘した。

本報告後の質疑応答において,参加者から遼・金・西夏・元にとっての科挙はいかなるものであったのか,という質問が出され,それについて白熱した議論が交わされた。前近代中国社会において重要な役割を果たした科挙が,異民族王朝にとっていかなる意味を有していたのかについて今後の検討課題としたい。

2)
報告者名(所属):
毛利英介(AA研共同研究員,日本学術振興会)
報告タイトル:
「遼金史関連資料集小考」

本発表では,遼金時代の文章を収集した資料集として,『全遼金文』が目下代表的なものとして存在することをまず述べた。そして,以下同書を手がかりに,遼代と金代に分けてそれぞれ清

代以来の資料集の編纂の過程について確認した。

遼代については，陳述『全遼文』が『全遼金文』の遼代部分の基礎となっていることを確認し，その上で『全遼文』の成立に至る過程を跡付けた。

『全遼文』は『遼文滙』の増補版であり，『遼文滙』は，それ以前のいくつかの資料集を基礎に，北京大学図書館・中央研究院所蔵の拓本等より新たな情報を加えたものであった。先立つ資料集とは，具体的には『遼文存』・『遼文萃』・『遼文補録』・『遼文続拾』の各書である。ただし，『遼文萃』以下の三書はいずれも繆荃孫『遼文存』の補完を旨としたものであり，今に至る遼代の資料集の系譜は『遼文存』に始まることを確認した。なお，『遼文存』以前にも遼代の資料集に関するいくつかの計画や実例は存在するものの，それらはいずれも後代に影響を与えるものではなかった。

金代については，清・道光年間成立の『金文最』が『全遼金文』の金代部分の基礎となっていることをまず確認した。そして，『金文最』以来同様の資料集の公刊はなされていないものの，その補綴の試みは幾つか存在したことを指摘した。その中，特に北京大学図書館古籍特蔵部編輯『稿本叢書』所収でいずれも繆荃孫編纂の『金文鈔』と『直隷金石文抄』に注目して分析を加えた。

まず『金文鈔』は，『金文最』との重複が存在せず，また『山右石刻叢編』に代表される引用書物が確認の限り範囲では『金文最』成立以後のものであることから，『金文最』の補完的性格をもつものとして編纂された可能性が高いことを指摘した。ただし，収録内容は現在からすれば概ね既知の範疇に属すため，史料的有用性は低いことも合わせて指摘した。

他方『直隷金石文抄』は，『金文最』との重複も存在することからその補完的書物ではなく，収録内容に照らして名称が不適切であり且つ未定稿である可能性が高いものの，内容が『芸風堂金石文字目』或は北京大学善本室所蔵の拓本と一致することから繆荃孫が自蔵の拓本に基づいて編纂したものと考えられること，収録内容に未知に近いものも多く存在することからその史料的有用性が一定程度認められること，等を指摘した。

以上，発表内容の多くは常識の範囲内であるものの，遼金史研究における繆荃孫の存在の重要性が確認された。また，『直隷金石文抄』などは利用が進んでおらず，「新史料」の紹介ともなったと考えられる。そして，一般論として言えば，遼金史研究において，なお清代学術の業績から取り入れるべきものがある可能性が指摘されたと言えよう。